



**Data** 2023-63

監督：藤井道人  
 脚本：平田研也、藤井道人  
 出演：岡田准一／綾野剛／広末涼子  
 ／磯村勇斗／駿河太郎／中山崇／黒羽麻璃央／駒木根隆介／山田真歩／清水くるみ／杉本哲太／柄本明／千葉哲也

## 👁️👁️ みどころ

韓国映画には“96時間ノンストップエンターテインメント”がお似合いだが、製作委員会方式花盛りの近時の邦画ではそれは到底無理？いやいや、藤井道人監督なら、岡田准一と綾野剛の共演で、それ以上のリメイク版も！

“マズい男”VS“ヤバい男” 激突の背景には巨大なマネーロンダリングという社会悪が！そんな社会問題提起を併せて行い、“二大悪人”を登場させたのが藤井版の特徴だが、その是非は？

とある地方都市のお寺の金庫（倉庫？）内に、あれほど膨大な量の札束が積みまれていることにビックリ！しかして、本作ラストに登場する“札束まみれの激突”はあなた自身の目でしっかりと。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■ 2014年の韓国映画を藤井道人がリメイク！各国でも ■

本作は2014年に韓国で公開され、345万人の観客動員を記録したキム・ソンフン監督の同名作品のリメイク。中国やフィリピンでもリメイクされた他、フランスでリメイクされた『レストレス』（22年）は2023年2月にNetflixで世界一斉配信後、全世界でNetflixグローバル映画ランキング1位を記録し、世界中の映画ファンを熱狂させたようだ。そんな2014年の韓国映画を、なぜか今、『新聞記者』（19年）『シネマ45』（24頁）等の藤井道人監督がリメイク。その主役は、“マズい男”・工藤祐司を演じる岡田准一と、“ヤバい男”・矢崎貴之を演じる綾野剛だからビックリ！今や日本映画界の大看板になっている岡田准一と綾野剛を起用し、同じく邦画界を牽引する藤井道人監督が、なぜそんな韓国映画のリメイクを？

その第1の理由は、同じく『最後まで行く』と題されたオリジナル版の素晴らしさだが、第2の理由は、邦画界でいい脚本が少なくなっていることの裏返し・・・？そう考えると、

本心から本作のヒットを願っているの？そんな思いも強い。他方、私がそれ以上に気になるのは、本作は少なくとも韓国版に匹敵するレベルの作品になっているの？ということだ。大ヒットした韓国版をリメイクする以上、監督や脚本家はそれなりの覚悟で取り組むはずだが、さて、本作と原作との異同やその優劣は？

## ■□■何度も見た予告編から考える「最後まで行く」とは？■□■

藤井監督が韓国版のリメイクを決断した1つの理由は、『最後まで行く』というタイトルにワクワクしたためらしい。しかし、韓国人的には「最後まで行く」のは良いことかもしれないが、「和を以て貴しとなす」を重視する日本的には「最後まで行く」のは必ずしも良いことではなく、タイミングを見た“丸い収め方”が大事だ。

私は本作の予告編を何度も見たが、そこでは雨の中を病院に急いで車を走らせている工藤祐司（岡田准一）がある男を跳ね飛ばした後、「どうする？どうする？」と焦りながら、結局その遺体をトランクの中に入れて現場を離れるシーンが印象的だ。そこで「慌てるな！落ち着け！」と自らに言い聞かせている工藤にかかってくる電話が、「お前、よく人を殺して平気でいられるな。お前はもう終わりで。」というものだからビックリ！電話をかけてきたこの男は一体誰？『最後まで行く』というタイトルは何を意味しているの？本作の予告編は、そんな興味で誰もが本編を見たくなるようにうまく作られていた。

私はそんな“仕掛け”にまんまとハマって(?) 今日、映画館の座席に座ったが、本編はそのタイトル通り「最後まで行く」のが最大のポイントになっている。2023年5月29日現在、ウクライナでは長期にわたったバフムトを巡る攻防戦を経て、いよいよウクライナ軍の“反転攻勢”が始まるようとしている。しかし、そこでは「最後まで行く」ことは求められておらず、良いタイミングでの和平が求められているはずだ。しかし、「藤井道人、動の集大成」と題したチラシが発行されている本作は、「ハラハラドキドキの連続」、「怒涛の展開」、「96時間ノンストップエンターテインメント」、「逃げまくっていたはずが、追いかける側になる」等々と書かれているように、「最後まで行く」ことが求められるらしい。もちろん、“映画は何でもあり”だから、それでもいいが、さて本作の“96時間ノンストップエンターテインメント”とは？

## ■□■韓国版と藤井監督リメイク版との異同は？その優劣は？■□■

本作は超話題作だから、キネマ旬報6月下旬号で8～19ページにわたって特集が組まれている。これはパンフレットと共に必読！その中で、脚本を書いた平田研也氏は「土台の物語を大事に、日本版のオリジナリティを」の見出しで、「やりすぎな韓国版を現実的に」と「説明は画に置き換え、尺を短く」という狙いを要領よく説明している。轢き逃げ刑事を麻薬横流し刑事が追い詰めるという韓国オリジナル版は、人間の原罪と原罪がせめぎあう韓国ノワールの金字塔であるナ・ホンジン監督の『チェイサー』（08年）（『シネマ22』242頁）と同じように、韓国映画が得意とする“ダーティーコップ”同士の対決をテーマにしたもの。そのリメイク版たる本作は、一方ではその原型を忠実に踏襲している。

他方、「オリジナル版を凌いで成功するリメイクなどありえない。という定説を覆して、日本映画もやれば出来る。これはもう、リメイクじゃない！」と自負する本作では、①ヤクザの組長・仙葉泰（柄本明）の登場と、彼が語る印象的な「砂漠と蛭螂」の寓話、②矢崎の上司で、婚約者・植松由紀子（山田真歩）の父親でもある県警本部長・植松（千葉哲也）の登場と、彼が果たすマネーロンダリングのキーマンとしての役割、等々の点で、日本版のオリジナリティを明確に打ち出している。

裏金や政治資金は藤井監督が得意とする社会問題提起によく使われるネタだが、本作のクライマックスに見る、お寺の巨大な金庫内に蓄えられた札束の量は私がかつて見たことのないほどの量だ。東京の都心ならいざ知らず、本作の舞台とされた地方都市では、いくら有力なお寺が政治家やヤクザと結託してもこれだけの裏金を作るのは不可能だと思われる。しかし、それはそれ、映画は映画だ。そんな本作の脚本は素晴らしい。しかして、アクションを得意とする岡田と綾野による、ハードな韓国映画に決して引けを取らない、札束まみれのアクションに注目！

あなたは、韓国オリジナル版と藤井監督リメイク版とのそんな異同をどう考える？また、その優劣は？

## ■□■死体と共に母親の遺体安置所でお通夜を！その気分は？■□■

雨の中を猛スピードで、しかも、携帯で話しながら。いくら、母親の死に目に会うためとはいえ、そりゃ少し無茶だ。その上、飲酒検問所で警察手帳を武器に、呼吸検査を執拗に拒否しているのは、酒を飲んでいるため・・・？そんな悪徳警官なら、いくら工藤が刑事課所属の刑事でも、交通課の巡査が取り締まれるはずだが、そこに突然、県警本部監察課の矢崎が「裏金作りの調査のため、工藤の話を知りたい」と登場！それは、工藤やその上司たる刑事課の淡島課長（杉本哲太）らにとっては絶体絶命のピンチだが、矢崎の登場によって、飲酒検問逃れと、死体の入ったトランクのチェックを逃れることができた工藤にとっては超ラッキー！？

急いで病院に駆けつけたものの、既に母親は息子の顔を見ることなく死んでしまったから、工藤はトランクに死体の入った車を駐車場に置いたまま、遺体安置所で棺の中の母親と共に通夜を過ごすことに。もちろん、これは異例のことだが、「日頃親不幸ばかりだったから、せめてお別れの時くらいは・・・」という工藤の殊勝な訴えによって実現したものだ。しかし、冒頭から見るように、工藤はマズい男ながら、どんなケースでもギリギリの言い逃れでその場を凌いできた男だから、今、彼が企んでいるのは、母親が入っている棺の中に何とかしてトランクの死体を入れ、明日、火葬場で一緒に焼いてしまうこと。なるほど、悪徳警官ならそれくらいのことには考えそうだが、果たしてそんなことが可能なの？また、そんな「企み」を持ちながら母親の遺体と共に一夜を過ごす工藤の気分は？

## ■□■なるほど！なるほど！予告編の“あのシーン”に納得！■□■

工藤の携帯に突然、「お前は人を殺した。知ってるぞ！」という趣旨のメールが入ってき

たのは一体なぜ？ひょっとして、雨の中での、あの轢き逃げ事件の一部始終を誰かが見ていたの？ちなみに、予告編では「お前はもう終わりだ。」という脅し文句だけだったが、本編では「死体をどこへやった？言え！」という、思いがけないストーリーになっていくので、それに注目！

さまざまなイベントで行われているマジックショーでは決して種明かしされることはない。ところが意外にも、本作は早い段階で、工藤の飲酒検問の場に現れた矢崎が、工藤による轢き逃げ事件と死体のトランクへの積み込み、現場からの逃走を目撃していたこと（だけ）がフラッシュバックの手法で明かされるので、アレレ。

“マズい男”の工藤が冒頭から焦りっ放しのバタバタ状態であるのに対し、スーツ姿をビシッと決めた“ヤバい男”の矢崎はあくまでクール。「病院に急いでいる」との工藤の言い分をあっさり認めた矢崎は、「明日、話を聞く」との工藤の言い分もアッサリ認めた上で、翌日、淡島課長らが待ち受ける警察署へ。そして、監察課の刑事らしく帳簿類を一通り調べたものの、「この程度の裏金なら問題ないでしょう。今回は見逃しましょう。」とアッサリ語ったからビックリ！「ウチの署で裏金が作られている」という告発が週刊誌に入ったのは、工藤の直近の行動がバレたためだから、裏金作りの全貌解明のためには工藤からの事情聴取が不可欠だ。ところが、「この程度の裏金」でお目こぼしになったため、工藤はもとより、署全体の汚点もすっぽりと闇の中へ。こりゃ、ラッキー！工藤も課長もそう思ったが、その後、矢崎の工藤への追及は、「あの死体をよこせ！」だったことが判明していく。それは一体なぜ？そこからが平田研也脚本のメインだから、観客は年末の4日間にわたって続く、96時間ノンストップエンターテインメントをタッグリ楽しめるはずだ。

## ■□■県警本部長とヤクザの組長が巨悪で結託！■□■

岸田文雄総理は2023年5月30日の記者会見で突然、秘書官を務めている長男・岸田翔太郎氏の事実上の更迭を発表した。その理由は、お昼のニュース番組で面白おかしく報道されている通り、誰がどう考えてもバカバカしい限りのこと。要は、岸田翔太郎氏は低レベルの甘ちゃん坊やに過ぎないということだ。

それに比べれば、本作に登場する二大悪人である県警本部長の植松とヤクザの組長・仙葉の悪の度は遙かにすごい。彼らがやっているのは、いわゆるマネーロンダリングだ。工藤が勤務する警察署における、刑事課ぐるみの裏金づくりはもちろん悪だが、お布施に税金のかからないお寺（宗教法人）は大規模かつ組織的なマネーロンダリングの絶好の舞台になる。地方都市にしてはあまりにも豪勢すぎる某お寺と植松が組んで、そのマネーロンダリングをやっていたわけだが、現金を置いているお寺の中の金庫の鍵を開けるには、鍵の他に指紋認証が必要だったらしい。しかし、その指紋認証を担う“生身の人間”は一体誰？それが本作最大のポイントになる。

ちなみに矢崎は植松県警本部長の娘・由紀子の婚約者だ。植松は矢崎の能力を買って2人の結婚を許したわけだが、もちろん矢崎は出世目当て（だけ）の政略結婚。そんなこと

は植松も了承済み。知らぬは（バカ）娘ばかりだが、本作に見る植松の親バカぶりは面白いし、矢崎の由紀子に対するラブラブぶりも面白い。しかし、それはすべて虚構のものであることが本作後半からはモロに見えてくるし、矢崎の能力も植松が買っていたほどではなかったことが見えてくるから、後半からは少しずつ仲間割れの雰囲気も・・・しかし、矢崎が植松からの敵命を受けて忠実に、工藤が轢き殺した男の死体を執拗に探し求めたのは一体なぜ？ちなみに、この男の名は尾田創（磯村勇斗）だが、彼とラブラブの仲にある岸谷真由子（清水くるみ）は、一体どこで彼の帰りを待っていたの？尾田はなぜ今、真由子の前に姿を現さないの？

そんなこんな96時間ノンストップエンターテインメントと、巨大なマネーロンダリングの二大悪人である県警本部長・植松とヤクザの組長・仙葉の姿はあなた自身の目でしっかりと。

### ■信長役の岡田准一もいいが、マズい刑事役もお見事！■

大ヒットした韓国版をリメイクした本作最大の見どころは、あくまでマズい刑事・工藤とヤバい刑事・矢崎という2人の“ダーティーコップ”の激突！韓国版はその面白さをあくまで個人のキャラのアクの強さによって表現しているそうだが、本作ではそこに巨大なマネーロンダリングという社会問題を加えるとともに、2人の巨悪が登場するから、興味がそちらに注がれる面もある。

本作中盤の怒涛のストーリー展開のポイントは、工藤が車で跳ね飛ばした死体が尾田であったことを明らかにした後、なぜ矢崎が必死に尾田の死体を探し求めて工藤を追及しているのかという点になる。そして、その種明かしがされ、工藤の目の前に私がかつて見たことのない量の札束が広がった後は、再三、不死鳥のように蘇ってくる矢崎と工藤との究極の対決となる。私は、1976年6月26日のアントニオ猪木 VS モハメド・アリの異種格闘技戦はもとより、アントニオ猪木の新日本プロレスにおける活躍ぶりを長い間見続けてきた。「プロレスは出来レース」という説もあるし、確かにTVで観ていてもそういう要素は否定できないが、それでもさまざまな伝説として今なお残っているアントニオ猪木の各種の名対決（激突）は面白い。しかして、本作ラストのクライマックスは、前述のように膨大な札束が積まれた金庫（倉庫）の中でのマズい刑事とヤバい刑事2人の肉弾戦になるので、それに注目！もちろん、その勝者は決まっているが、藤井監督と脚本を書いた平田研也氏が用意した、年末の72時間を描く本作の本当のラストに見る結末とは？

現在、NHK大河ドラマで放映中の『どうする家康』における松本潤演ずる徳川家康はいかにも頼りない若造だが、それを一方的にリードしている少し年上の岡田准一演ずる織田信長は格闘技大好き人間としても描かれている。そんな信長役を演じる岡田准一もいいが、本作でマズい刑事・工藤を演じる岡田准一もお見事だから、その雄姿はあなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年6月2日記